

第 48 回弘明寺サロン開催記

テーマ 「徳恵姫」(日本)「徳惠翁主 덕혜옹주」(韓国) 2冊の本から学ぶ

日時 : 平成 28 年 9 月 17 日(土) 14:00~16:30

場所 : 第 4 講義室

参加者 : 31 名

講演者 : 村田カズ子さん

第 48 回を迎える弘明寺サロンのオープニングは恒例となった学歌斉唱からスタートした。

今回のテーマは 村田カズ子さんの卒業論文のテーマより「李氏朝鮮王朝最後の王女」を取り出しての講演である。村田さんは朝鮮史を学んでおられ、その過程で韓国本土、濟州島などたびたび訪れて学識を深めてこられていたところ 偶然旅行の添乗員から勧められた一冊の本(写真左)の(徳惠翁主 덕혜옹주)を手にしたことで数奇な運命に翻弄された李氏朝鮮王朝最後の王女を知ることになったとのこと。

そう言う聴講の私たちのほとんども同じように当時の朝鮮と日本との政略結婚の悲しい実話をこの講演で知ることになる。

現在も日本と韓国の間はまだまだ解けない関係を表題の「2冊の本から学ぶ」を例にとって話された。



村田カズ子さん

2冊の本とは日本人の著者本馬恭子氏の「徳恵姫」と韓国の権丕暎氏の「徳惠翁主 덕혜옹주」である。「翁主」とは 側室の皇女の称号とのことである。



日本留学時女子学習院で学んでいた王女が政略結婚で対島の宗家に嫁ぎ、精神を病み離縁、帰国、と悲運に見舞われていく様子を文献や証言を元に伝記本として刊行されたのが 本馬さんの「徳恵姫」、それに対して韓国側の「徳惠翁主」では 宗伯爵の宗武志を実物は長身で素敵な男性(下右の写真)なのに背の低い醜男でしかも冷酷非情な男性に描くことで王女の悲劇度を高めるてだてとし、史実をより悲劇に仕立て上げることで韓国での支持を得たようである。

権氏の「徳惠翁主」と本馬氏の「徳恵姫」

史実に基づくよりも韓国の読者が望む日本人像を描くことで支持を得られるということが根の深い日韓の関係を物語っているようである。

政略結婚は古今東西、政権維持や侵略や人質などの形で執り行われてきたが 得恵姫を通してもう一つの政略結婚を村田さんは示された。

奇しくも 徳恵姫の兄宮のお嫁さんが日本から政略結婚で嫁いできた梨本宮方子(なしもとのみやまさこ)さんだということである。



宗武志と徳恵姫(対馬巖原)

梨本宮方子さんの方が一般に知られて いるようである。方子さんが結婚した相手は李氏朝鮮王朝最後の皇太子であるのは当然のことである。



← 講演風景

方子さんは昭和天皇の後候補だったらしく運命というものに抗うことなく翻弄された様子がうかがい知れる。

村田さんによると この方子さんと徳恵姫は 晩年一緒に王宮「昌徳宮チャンドックン」内の「楽善齋ナクソンジエ」で過ごしていたという。

徳恵姫の死後 9日後に方子さんも後を追うように亡くなっている想像の域を超えないが 同じ時期に亡くなるほど 心を通わせていたのではないかと思われる。



方子さんと結婚した徳恵姫の兄、英親王に日本政府より元北白川邸2万坪の土地、屋敷が贈られている。

日韓併合の意味するところが分かる待遇である。

現在この李王家の屋敷跡は **パストゥー**を伝える平成22年8月の新聞 赤坂プリンスホテル旧館とのことである



昌徳宮（チャンドックン）

ソウルには5つの王宮があり上の昌徳宮（チャンドックン）は現在ユネスコ世界遺産に登録されているとのこと、王の御所として政務が執り行われていたようだ。

5つの王宮のうちの徳寿宮（トクスグン）はソウル市庁舎の隣に位置し李氏朝鮮王朝の宮殿である。この宮殿は徳恵姫の父、高宗も王位を移譲後住んだ宮殿であり。特に正門の左の堀にそって800m続く石垣道（トルダムキル）は韓流ドラマファンなら知らない人はいない有名な散策道である（写真左）。



←トルダムキルを歩く
村田さん達研修旅行の
一行



村田さんの講演内容から 日韓の現在までに至る複雑な関係に苦慮しながらも正確な朝鮮史を学ぼうとされている姿を 講演を聞きながら感じる事が出来た。



政略結婚で人生を操られた二人の女性、特に最後まで福祉事業にささげられた梨本宮方子さんは 国葬に準じるお葬式で見送られた、というエピソードで韓国の国民の真贋を見分ける目を見ることが出来た。

サロンの締めは 澤村雅嗣氏による〈太極拳 TIME〉。予防、治療に効果があるとされる「練功18法の前段」で首、肩、肩甲骨、背骨などをほぐし今日の弘明寺サロンを終えることが出来た
(記録：万場由美子)